

資料

全国の幼稚園・保育所における幼児と高齢者の ふれあいに関する実態調査

關 戸 啓 子^{*1}

はじめに

今日の子どもたちは、多様な人間関係を経験する場が少なくなっているといわれている。異年齢とのかわりは言うに及ばず同年齢でさえも、相互交渉の少ない中で生活している子ども達にとって、人間関係の様々な実相を体験する場も限定されているばかりか、物質的豊かさとは反比例して人的環境が目を覆うほどの貧困さを呈するようになってきた¹⁾と指摘されている。子どもの社会的交渉の範囲が広がっていくにつれて、子どもの社会的経験は拡大していく²⁾のであり、子どもが社会に適応し成長発達するためには、多様な人間関係から、多くの経験をしていくことが大切である。特に幼児期における体験は、その後の人生に与える影響が大きい³⁾といわれており、近年、幼児教育の現場では高齢者とのふれあいを実施しているところが多くなってきている。

さらに、最近では幼稚園や保育所と高齢者用施設が同じ建物内や、隣り合って建築されている複合型施設など⁴⁾もみられる。このように、積極的に幼児と高齢者のふれあいを推進しようとする試みはいまだ始まったばかりであり、その実態はほとんど明らかにされていない。そこで、本研究では、全国の幼稚園と保育所を対象に、幼児と高齢者のふれあいについて実態調査を行った。

なお、本研究においては「ふれあい」という用語は、次のように定義して用いる。幼児と高齢者が単に同じ場所にいるとか、物理的に顔を合わせている状況をいうのではなく、幼児と高齢者が一緒に笑ったり気持ちが共有できるような交流を「ふれあい」という。すなわち、パーバル・ノンパーバルに、相互に交流することによって、そこに対人感情を伴うような人間関係が形成される状況を「ふれあい」という。

調査方法

1. 調査方式

全国の幼稚園・保育所へアンケート用紙を郵送し、返送を依頼する方式で質問紙調査を行った。研究の趣旨を説明する文章を付け、返送は任意とした。

2. 調査対象

幼稚園は、『2000年版全国学校総覧(原書房発行)』に掲載されている14,229の幼稚園から、無作為に700の幼稚園を選び郵送した。ただし、県によって幼稚園数に差があるため、県ごとに幼稚園数を調べ、全国数に占める割合を算出した。その比に従って、各県より幼稚園を無作為に選んだ。保育所は2000年8月現在で「日本保育協会」に加盟している、4,373の保育所から、幼稚園の場合と同様の方法で、700の保育所を選び郵送した。

3. 調査時期

発送は、2000年8月1日～11日の間に行った。返送期限は、2000年9月中旬頃までとした。2000年10月31日までに到着したアンケート用紙を有効として取り扱った。

結 果

アンケートの回収数は幼稚園406(回収率58.0%)、保育所388(回収率55.4%)であった。また、有効回答数は、幼稚園396(有効回答率97.5%)、保育所377(有効回答率97.2%)であった。

1. 回答が得られた幼稚園・保育所の背景

有効回答を寄せた幼稚園と保育所に通っている子どもの数は、表1のとおりである。通っている子

*1 徳島大学 医学部 保健学科
(連絡先) 関戸啓子 〒770-8509 徳島市蔵本町3-18-15 徳島大学
E-Mail: sekido@medsci.tokushima-u.ac.jp

もの数は、幼稚園・保育所とも51~200人の間が多く、どちらも全体の約85%を占めていた。中規模の幼稚園・保育所を中心にかたより無く回答が寄せられていた。

表1 通園している子どもの数

子ども数	幼稚園	保育所
0-50	7 (1.8%)	33 (8.8%)
51-100	101 (25.5%)	169 (44.8%)
101-150	141 (35.6%)	121 (32.1%)
151-200	85 (21.5%)	31 (8.2%)
201-250	27 (6.8%)	15 (4.0%)
251-300	25 (6.3%)	3 (0.8%)
301以上	10 (2.5%)	2 (0.5%)
無回答	0 (0.0%)	3 (0.8%)
合計	396 (100%)	377 (100%)

子どもの受け入れ開始年齢は、表2に示すとおり、ほとんどの幼稚園は3~4歳児から、保育所は0歳児からで、幼稚園と保育所の特徴を反映していた。国公立・私立の別は表3に示すとおり、幼稚園は国公立と私立がほぼ半々であったが、保育所は私立がほとんどであった。

表2 受け入れ開始年齢

年齢	幼稚園	保育所
0歳児~	0 (0.0%)	365 (96.8%)
1歳児~	0 (0.0%)	10 (2.7%)
2歳児~	4 (1.0%)	2 (0.5%)
3歳児~	248 (62.6%)	0 (0.0%)
4歳児~	119 (30.1%)	0 (0.0%)
5歳児~	24 (6.1%)	0 (0.0%)
無回答	1 (0.3%)	0 (0.0%)
合計	396 (100%)	377 (100%)

表3 公立・私立の別

	幼稚園	保育所
国公立	211 (53.3%)	28 (7.4%)
私立	185 (46.7%)	349 (92.6%)
合計	396 (100%)	377 (100%)

2. 幼児たちが高齢者とふれあう機会

1) 高齢者が利用する施設の併設の有無

幼稚園と保育所に、高齢者が利用する施設の併設の有無をたずねたところ、表4に示すような回答であった。幼稚園では4施設、保育所では20施設に高齢者が利用する施設が併設されていた。

表4 高齢者が利用する施設の併設

		幼稚園	保育所
施設	あり	4 (1.0%)	20 (5.3%)
	なし	392 (99.0%)	357 (94.7%)
合計		396 (100%)	377 (100%)

2) 幼児たちが高齢者とふれあう機会の頻度

幼稚園と保育所に、幼児たちが高齢者とふれあう機会の頻度についてたずねた結果をグラフであらわしたものが図1である。幼稚園・保育所ともに年に1~2回から数回という回答が多く、約75%を占めていた。ふれあう機会がないという回答も、幼稚園で約20%、保育所で約10%あった。

さらに、高齢者が利用する施設を併設していても、必ずしも毎日ふれあう機会を設けているわけではないことがわかった。高齢者が利用する施設を併設している4ヶ所の幼稚園のうち、「ほぼ毎日ふれあう機会がある」と回答したのは2施設であり、1施設は「全くふれあう機会はない」と回答していた。同様に20ヶ所の保育所においても、「ほぼ毎日ふれあう機会がある」と回答したのは3施設のみであった。逆に、高齢者が利用する施設を併設していなくても、地域の高齢者や近くの高齢者用施設を利用して、毎日ふれあいの機会が持てるよう工夫している幼稚園や保育所もあった。

3) 高齢者とのふれあいの形態

幼稚園と保育所で「高齢者とふれあう機会はない」と回答した以外の施設に、高齢者とのふれあいの形態をきいた結果をグラフであらわしたものが図2である。

複数回答であるが、幼稚園・保育所ともに「幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が鑑賞する」という形態が最も多かった。次は、「幼児たちが、訪ねて来た高齢者と一緒に遊ぶ」という形態が多かった。

4) 高齢者とふれあう幼児たちの様子

高齢者とふれあう時の幼児たちの様子について、幼稚園と保育所にたずねた結果をグラフであらわしたものが図3である。

複数回答であるが、幼稚園・保育所ともに「普段よりうれしそうである」という回答が最も多かった。次には、「普段よりはしゃいでいる」「緊張しているように見える」という回答が多かった。

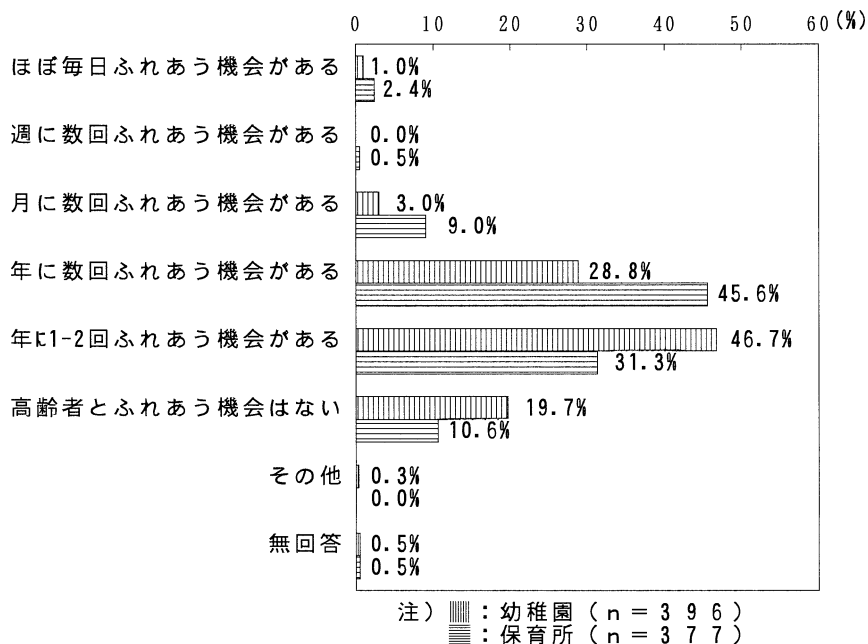


図1 幼児たちが高齢者とふれあう機会の頻度

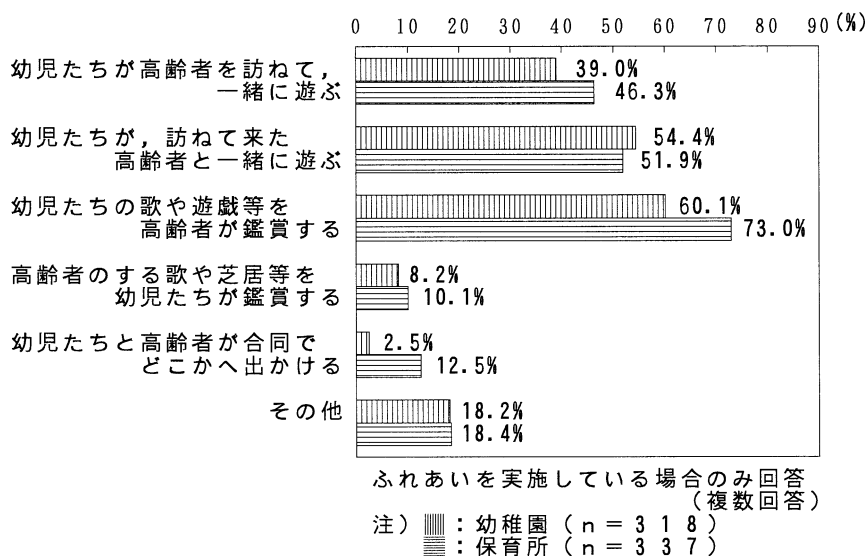


図2 高齢者とのふれあいの形態

3. 高齢者とのふれあいの今後について
 —実施している場合—

1) 今後の高齢者とのふれあいの頻度

高齢者とのふれあいを実施していると回答した幼稚園と保育所に、今後のふれあいの頻度についてきいた結果をグラフであらわしたものが図4である。

幼稚園と保育所ともに「もっと、増やしていきたい」という回答が最も多かった。次には、「現在のままで良い」という回答が多かった。「もう少し、減らしたい」と回答した幼稚園・保育所はなかった。

2) 「今後の高齢者とのふれあいの頻度」に対する回答理由

「今後の高齢者とのふれあいの頻度」に対する質問において、「もっと、増やしていきたい」と回答した幼稚園・保育所にその理由を、たずねた結果が表5である。

「もっと、増やしていきたい」理由として最も多かったのは、幼稚園・保育所ともに「子どもたちは核家族のなかで育っており、高齢者とのふれあいは重要である」であった。次には、「高齢者が喜んでく

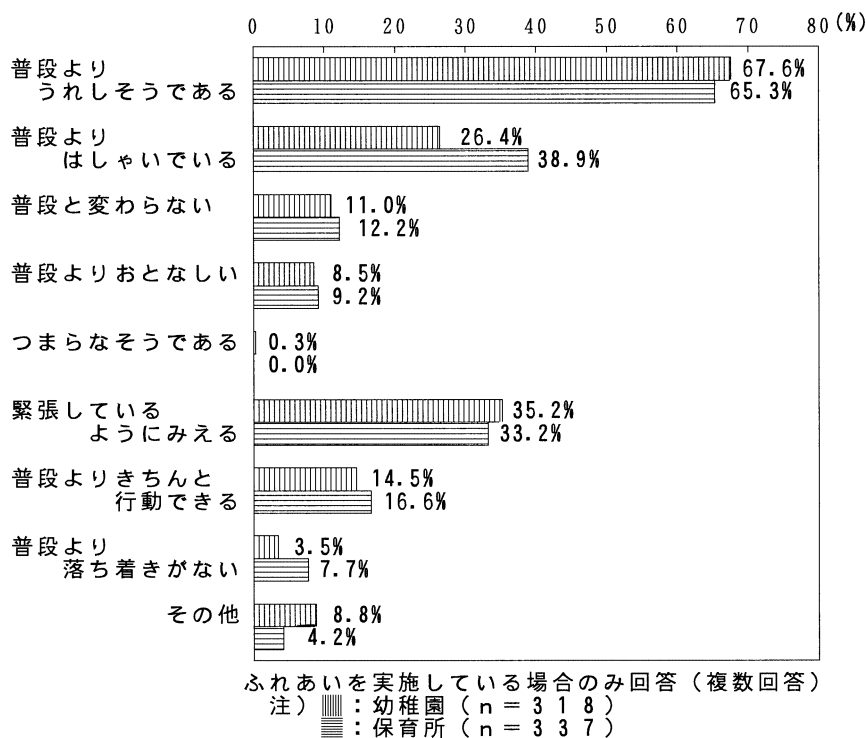


図3 高齢者とふれあう幼児たちの様子

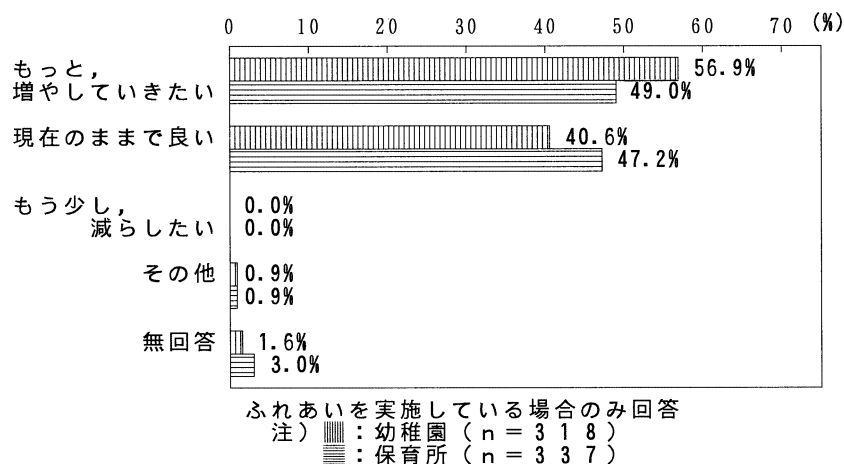


図4 今後の高齢者とのふれあいの頻度

れ、子どもたちも職員もやさしい気持ちになれるから」という理由が幼稚園・保育所ともに多かった。

「今後の高齢者とのふれあいの頻度」に対する質問において、「現在のままで良い」と回答した幼稚園・保育所にその理由をたずねた結果が表6である。理由として最も多かったのは、幼稚園・保育所ともに、「仕事が多く、これ以上の調整は無理で、職員の負担が大きすぎる」というものであった。

4. 高齢者とのふれあいの今後について

—実施していない場合—

1) 高齢者とのふれあいを実施していない理由

子どもたちと高齢者がふれあう機会がないと回答した幼稚園と保育所に、その理由をきいた結果をグラフであらわしたものが図5である。理由として最も多く幼稚園・保育所ともにあげた回答は、「高齢者が利用する施設が近くにないため」であった。次に多い理由は「これまで考えたことがなかった」「職員の負担が大きいため」というものであった。

表5 「今後の高齢者とのふれあいの頻度」に対する回答理由
—「もっと、増やしていきたい」場合—

「もっと、増やしていきたい」理由	(自由記載)	幼稚園 (n=181)	保育所 (n=165)
子どもたちは核家族のなかで育っており、高齢者とのふれあいは重要である		93 (51.4%)	80 (48.5%)
高齢者が喜んでくれ、子どもたちも職員もやさしい気持ちになれるから		19 (10.5%)	17 (10.3%)
1, 2回のふれあいでは効果はないので、回を重ねていきたい		10 (5.5%)	12 (7.3%)
昔の遊びを教えてもらうことができるから		14 (7.7%)	5 (3.0%)
言葉では表現できないが、両者にとって良いと思うから		7 (3.9%)	6 (3.6%)
高齢者が利用する施設側から要望されている		2 (1.1%)	4 (2.4%)
高齢者を尊敬する態度等、人に対するマナーを身につける機会になる		2 (1.1%)	2 (1.2%)
その他		8 (4.4%)	2 (1.2%)

(複数回答)

表6 「今後の高齢者とのふれあいの頻度」に対する回答理由
—「現在のままで良い」場合—

「現在のままで良い」理由	(自由記載)	幼稚園 (n=129)	保育所 (n=159)
仕事が多く、これ以上の調整は無理で、職員の負担が多すぎる		27 (20.9%)	39 (24.5%)
現在の回数でふれあいの機会は十分である		21 (16.3%)	8 (5.0%)
子どもに負担が大きい		2 (1.6%)	21 (13.2%)
新しいことを始めるのではなく、現在の幼児教育や保育の内容の充実を計りたい		12 (9.3%)	8 (5.0%)
交通手段、感染の危険、健康等、双方の受け入れ体制が整わない		5 (3.9%)	10 (6.3%)
地域で自然にふれあう機会を大切にしたい		8 (6.2%)	4 (2.5%)
現在はほかの事に力を入れているので(子育て支援等)		2 (1.6%)	1 (0.6%)
その他		10 (7.8%)	9 (5.7%)

(複数回答)

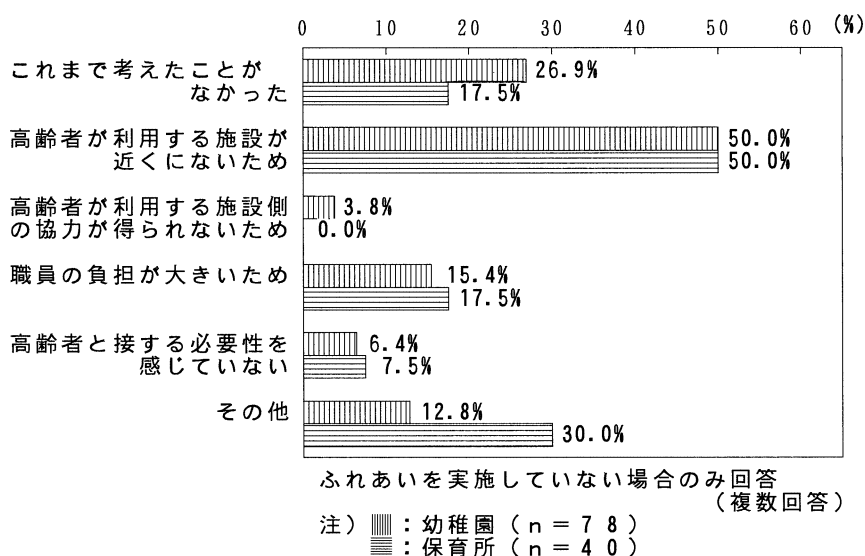


図5 高齢者とのふれあいを実施しない理由

2) 高齢者とのふれあいを今後実施するか否か
現在高齢者とのふれあいを実施していない施設に、今後実施するか否かをきいた結果をグラフであらわしたものが図6である。

幼稚園の半数と保育所の6割が「高齢者とふれあう機会を設けるよう考えたい」と回答した。しかし、「現在のままで良い」つまり高齢者とふれあえる機会を準備することを考えていないと回答した幼稚園・

保育所も約2割あった。

3) 「高齢者とのふれあいを今後実施するか否か」に対する回答理由

「高齢者とのふれあいを今後実施するか否か」という設問に対して、「高齢者とふれあう機会を設けるよう考えたい」と回答した幼稚園と保育所にその理由をたずねた結果が表7である。

「高齢者とふれあう機会を設けるよう考えたい」

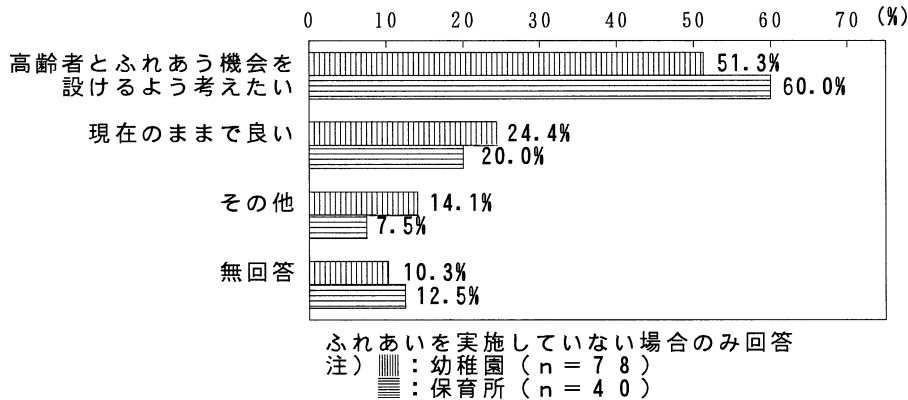


図6 高齢者とのふれあいを今後実施するか否か

表7 「高齢者とのふれあいを今後実施するか否か」の回答理由
 —「高齢者とのふれあう機会を設けるよう考えたい」場合—

「高齢者とのふれあう機会を設けるよう考えたい」理由 (自由記載)	幼稚園 (n=40)	保育所 (n=24)
高齢者とのふれあいでやさしい心を育てたい	21 (52.5%)	6 (25.0%)
核家族が多いので、高齢者とのふれあいをもちたい	9 (22.5%)	2 (8.3%)
日本の伝統的な遊びや知恵を教えて欲しい	7 (17.5%)	4 (16.7%)
高齢者にも子どもたちにも良い影響があると思うので	4 (10.0%)	1 (4.2%)
幼児が喜ぶので増やしたい	2 (5.0%)	0 (0.0%)
その他	5 (12.5%)	2 (8.3%)

(複数回答)

表8 「高齢者とのふれあいを今後実施するか否か」の回答理由
 —「現在のままで良い」場合—

「現在のままで良い」理由 (自由記載)	幼稚園 (n=19)	保育所 (n=8)
これ以上行事を増やすことは、計画的にも職員の負担面からも無理	8 (42.1%)	2 (25.0%)
自然にふれあう機会があれば良いと思うので	5 (26.3%)	2 (25.0%)
経済的に難しい	2 (10.5%)	0 (0.0%)
ほかの教育方法に力を入れたい	2 (10.5%)	0 (0.0%)
高齢者、幼児双方の健康面に対して対処方法がわからない	1 (5.3%)	1 (12.5%)
その他	1 (5.3%)	1 (12.5%)

(複数回答)

と回答した幼稚園と保育所は、ともに「高齢者とのふれあいでやさしい心を育てたい」という理由が最も多かった。

「高齢者とのふれあいを今後実施するか否か」という設問に対して、「現在のままで良い」と回答した幼稚園と保育所にその理由をたずねた結果が表8である。

「現在のままで良い」と回答した幼稚園と保育所は、ともに「これ以上行事を増やすことは、計画的にも職員の負担面からも無理」「自然にふれあう機会があれば良いと思うので」という理由を多くあげていた。

5. 「幼児と高齢者のふれあい」に対する自由な意見

幼稚園と保育所に、「幼児と高齢者のふれあい」に対して感じていること、考えていることなどを自由

に記載してもらった結果が表9である。

幼稚園・保育所ともに「幼児と高齢者の双方に意義のある活動にすべきである」「自然な形でふれあいが望ましい」「イベント的な活動ではなく、継続することが大切である」という意見が多かった。また、幼児・高齢者ともに互いに相手に馴染めない人もおり、実践する際の難しさについても意見があった。高齢者の健康面についても、憂慮する意見があり、幼児・高齢者双方に怪我があってもいけないという心配も述べられていた。

考 察

幼児たちと高齢者のふれあいの実態について、全国的なアンケート調査を実施した結果、高齢者が利

表9 「幼児と高齢者のふれあい」に対する自由な意見

主要な自由意見のまとめ	幼稚園	保育所
幼児と高齢者の双方に意義のある活動にすべきである	13	20
自然な形でふれあいが望ましい	14	13
イベント的な活動ではなく、継続することが大切である	13	12
核家族化がすすみ、人とかかわりが希薄な今日にあって、大切なことだと思う	13	7
子どもたちは、高齢者とふれあっているときには笑顔で楽しそうである	3	17
高齢者というよりも、立派に生き抜いた先輩の人格にふれるような機会にしたい	8	7
同じ敷地内に、高齢者が利用する施設があるのが望ましい	7	4
今日の教育に欠けている部分を補う方法として、積極的に取り組むべきである	2	8
幼稚園・保育所だけでなく、家庭でも高齢者とのふれあいを大切に考えて欲しい	4	5
高齢者の方でも、子どもが好きなお人ばかりではないので、ふれあいの企画は大変である	2	6
高齢者と馴染めない子どももあり、ふれあいが楽しいと感じない子どももいる	2	6
日常の幼児教育や保育にどのように取り入れたら良いのか、考えていきたい	5	2
幼稚園・保育所を地域に開くことによって、自然とふれあいが実施できるのが理想である	4	3
高齢者とのふれあいによって、人を思いやる心やいたわりなどの心が育つと思う	4	3
高齢者の方の健康面がわからないので、接する方法に困るし、お互いに怪我をしても困る	3	4
歌を歌って発表するだけでなく、直接に手や体に触れたり、会話したりする会にしたい	3	3
職員自身も体験するべきである	1	2
高齢者と限定するのではなく、子どもたちに幅広い年代の人とふれあわせたい	1	1
幼児期のみでは意味がないので、小・中・高等学校と継続していけたら良いと思う	1	1

用する施設を併設している複合型の幼稚園と保育所はまだ少なく、幼稚園で4カ所、保育所で20ヶ所であった。このような複合型施設は、幼児と高齢者のふれあいをすすめる上では、理想的と考えられるが、実際には非常に少ないことがわかった。

全国の幼稚園と保育所における、幼児と高齢者のふれあい頻度は、年単位の施設がほとんどで年に1~2回から数回という回答が多かった。つまり、継続的なふれあいではなく、月ごとの行事である七夕祭りとか雛祭りという会と同じように、行事的な扱いで実施されていることが予想される。そのようななかで、「ほぼ毎日ふれあう機会がある」と回答した施設も幼稚園で4カ所、保育所で9カ所あった。この回答は、複合型施設からのものであると予想されたが、必ずしもそうではなく、複合型施設であっても日常的なふれあいを実施していない幼稚園・保育所もあった。高齢者とのふれあいという点で恵まれた環境にありながら実施していない施設もあれば、環境的には難しいなか工夫してふれあいを実施している施設もあり、幼稚園・保育所の考え方が反映されていることが推察される。また、高齢者とふれあう機会を全く設けていない施設もあった。幼稚園で2割、保育所で1割の施設では高齢者とのふれあいの機会がないと回答しており、改善の余地が考えられる。

高齢者とのふれあいを実施している場合においても、その形態は「幼児たちの歌や遊戯等を高齢者が鑑賞する」が最も多く、ふれあいとは呼べない形態

のものである。これは、年に数回の行事的な企画では仕方ないことである。ふれあいと呼べるような交流が生じるためには、高頻度な関わりが必要だと考えられる。

高齢者とふれあう時の幼児たちの様子は、ほとんどの幼児が普段よりうれしそうであり、幼児たちにとって高齢者とふれあうことは楽しみであることがわかる。しかし、高齢者とのふれあいに慣れるために時間がかかる幼児たちのなかには、普段よりはしゃいだり、緊張したりという様子もみられるようである。慣れない人への対応ということも、ひとつの経験であり幼児にとって貴重なものである。しかし、順応性の高い幼児は高頻度に高齢者と接する機会があればすぐに緊張はとけて、楽しく高齢者とふれあえるようになるであろう。

すでに、幼児と高齢者のふれあいを実施している幼稚園・保育所に対して、今後ふれあいの頻度を増やすのか否かについてきいたところ、「もっと、増やしていきたい」と「現在のままで良い」という回答にほぼ同数でわかれた。「もう少し、減らしたい」と回答した幼稚園・保育所はなく、不要と考えている施設はないことがわかった。それぞれ理由をみると、「もっと、増やしていきたい」という幼稚園・保育所では、現代の核家族という高齢者がいない世帯で育つ幼児たちのために重要であると考えているためであることがわかった。核家族で育つ幼児たちのことを考えて、高齢者とのふれあいを増やすように努力しようとする姿勢が窺えた。

「現在のままで良い」と回答した理由をみると、仕事が多く職員の負担をこれ以上増やせないという内容が最も多かった。関連する理由として、「新しいことを始めるのではなく、現在の幼児教育や保育の内容の充実を計りたい」「地域で自然にふれあう機会を大切にしたい」「現在はほかの事に力を入れているので」というものがあった。現実問題として忙しい幼稚園や保育所の現場で、多くの仕事を調整しながら職員が働いている現状のなかで、次々と新しいことを推進していくことは難しいという切実な理由が存在しているようだ。また、「現在の回数でふれあいの機会は十分である」という回答については、現状で満足しているものと考えられるが、教育として満足しているのか、職員の負担等から考えて十分努力しているという点で満足しているのかは不明である。さらに、もうひとつの理由として、幼児と高齢者の健康面があげられている。「子どもの負担が大きい」「交通手段、感染の危険、健康等、双方の受け入れ体制が整わない」という理由である。確かに、高齢化に伴い身体の諸機能が落ちている高齢者と、活発に動きまわることが成人ほど感染に対する抵抗力が弱い幼児の特徴を考えると、もし事故とか健康障害を起こしたらと不安になるのは当然である。この健康面に対する対応は、今後十分検討される必要があるであろう。

現在、幼児と高齢者のふれあいを実施していない幼稚園と保育所に対して、その理由をきいたところ、それぞれ「高齢者が利用する施設が近くにないため」と半数が回答した。仕方ない理由であるが、近隣の老人クラブとのふれあいなど、高齢者用の施設がない場合でもほかの方法は考えられるので、実施への検討が望まれる。

現在、幼児と高齢者のふれあいを実施していない理由として、「これまで考えたことがなかった」と回答した幼稚園・保育所に対しては、今回のアンケート調査等が検討の機会になることが期待される。次には、やはり「職員の負担が大きい」という理由が多かった。特に、これまで高齢者とのふれあいを実施していない施設にとっては、新たなことを始めるには多くのエネルギーが必要で、日頃の職員の忙しさをみていると企画できないというのは、本音であろうと思われる。

少数であるが「高齢者と接する必要性を感じてない」という回答もあった。幼児たちの対人関係に関する現状に反する回答ではないかと感じたが、この回答欄に「当施設は昔ながらの農業を主体とした大家族がほとんどを占める村のなかに位置しており、子どもたちはおじいちゃんやおばあちゃんに囲まれて

生活しているの、特別にふれあいを実施する意味を感じていない」とメモを入れてくれていた施設があった。全てかどうかはわからないが、これに近いような現状があるために、施設内でのふれあいの必要性は感じていないという意味も含まれているのであろう。

現在、幼児と高齢者のふれあいを実施していない幼稚園と保育所に対して、今後どうするかについて質問したところ、「高齢者とふれあう機会を設けるように考えたい」が半数以上で、「現在のままで良い」が約2割であった。「高齢者とふれあう機会を設けるように考えたい」理由は、「高齢者とのふれあいでやさしい心を育てたい」という、幼児たちに対する効果を期待してのことであった。「現在のままで良い」つまり、幼児と高齢者とのふれあいを今後も実施する予定がない理由は、やはり職員の負担増とそれに関連する理由が主であった。高齢者と幼児双方の健康面に対する心配をあげている幼稚園と保育所も1カ所ずつあった。これは、すでに幼児と高齢者のふれあいを実施しているが、これ以上頻度を増やせないとして幼稚園と保育所があげた理由と良く一致していた。高齢者とのふれあいを始めるにも、増やすにもネックになっている問題は同じようである。

幼児と高齢者のふれあいについて、幼稚園と保育所から自由回答でもらった意見をみると、積極的な意見と消極的な意見にわかれている。積極的なものとしては、幼児たちと高齢者のふれあいを行事的なものではなく日常的なものにすることによって、自然なふれあいにすることを望む声である。その一方、高齢者の方が幼児が好きならばいいこと、幼児も高齢者に馴染めないことがあることや、お互いに怪我をしても困るといった不安も述べられている。確かに、高齢者と幼児と一口にいっても、様々な個性があり全ての人が楽しくふれあえない場合も生じるであろうし、怪我等に関する心配は当然のことである。幼児と高齢者の日常的なふれあいは誰しも望ましいと思うわけではあるが、こうした問題も陰にあることを良く踏まえた上で、実施が検討されなければならないことが示唆された。

ま と め

全国の幼稚園・保育所に、幼児と高齢者のふれあいの実態に対してアンケート調査を行った結果、高齢者の利用施設が併設されている複合型の幼稚園・保育所はまだ少ないことがわかった。複合型の幼稚園・保育所でさえ、毎日高齢者とふれあいの機会を持っていない施設もあり、日常的に高齢者とふれあえる環境を提供できている幼稚園・保育所はまれで

あった。

しかし、多くの幼稚園・保育所は高齢者とふれあえる行事等を企画し、なるべくふれあいを推進していこうとしている姿勢は窺えた。推進できない理由としては、職員の負担増が大きな問題であった。高齢者とのふれあいが有意義なものになるためには、職員の適切なサポートが不可欠である。自由記載の欄にも、職員に今以上の負担がかけられないという事情が記されていた。さらに、ふれあいが推進しにくい理由として、幼児と高齢者双方の感染や怪我など健康面に対して憂慮する記載が多くあった。

高齢者とのふれあいが行事的な内容に留まり、日

常化しにくい原因として職員の負担と幼児たちと高齢者双方の健康面に対する不安があることが示唆された。

人員の確保など、高齢者と日常的に活発なふれあいを行えるような十分なサポート体制が整えられるためには、幼児が高齢者とふれあうことの意義が明らかにされ、広く認知されることが最も必要であると考えられる。

本研究は、2000年度笹川科学研究助成を受けて行った研究の一部である。

文 献

- 1) 坂口哲司：1章 人間関係。坂口哲司編，保育・家族・心理臨床・福祉・看護の人間関係 ―人間の生涯・出会い体験―，初版，ナカニシヤ出版，京都，9，1998。
- 2) 住田正樹：子どもの発達社会学。子どもの仲間集団と地域社会，九州大学出版，福岡，1-4，1985。
- 3) 佐藤眞子：人間関係の発達心理学 2 乳幼児期の人間関係，初版，培風館，東京，19-24，1996。
- 4) 多田千尋：第2章 世代間交流の形をデザインする。遊びが育てる世代間交流，初版，黎明書房，名古屋，30-51，2002。

(平成17年11月20日受理)

An Investigation of Communication between the Elderly and Pre-School Children in Kindergarten and a Day Care Nursery

Keiko SEKIDO

(Accepted Nov. 20, 2005)

Key words : communication, elderly, pre-school children

Correspondence to : Keiko SEKIDO

Major of Nursing, School of Health Sciences

The University of Tokushima

Tokushima, 770-8509, Japan

E-Mail: sekido@medsci.tokushima-u.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.15, No.2, 2006 655-663)